

## ちょっとスペインまで



島野 公 利 (春秋会)

1993年1月22日、アルバイトで貯めたお金を握りしめ、一人スペインに旅立った。「お金が続く限りいてやろう」と、6ヶ月の往復チケットにした(さらに安い方のfixにした。fixでもオフシーズンなら現地での便の変更が可能との情報もgetしていた)。旅費を節約したいので、アエロフロートにした。

アエロフロート機は考えていたほど古くはなく、むしろ比較的新しい機体のように、入って行くと新しい感じの臭いがした。空席も多く、ゆったりと座ることができた。機内で、やたら日本文学に詳しく、流暢な日本語を話すロシア人の男と知り合いになった。彼は、「僕のこのターボライターは、このジェット機のジェットエンジンの技術を使ったもので、ロシアが開発したものだ」とか、「僕は実は政府の仕事で、日本の本で面白いものをロシアに紹介しているんだ」とか、真顔で話す。本当かどうか即座には確かめられない、延々と続く話に、僕は半信半疑ながらも感心していた。そろそろモスクワ空港に着くという頃、モスクワ空港が雪で閉鎖された、との機内アナウンスが流れた。3時間待ちでマドリッド行きに乗り換えるはずだった。

乗客はフィンランドのヘルシンキ国際空港に飛行機ごと強制連行となった。ロシア人の彼は、「僕はここからなら列車で3~4時間で家に帰れるから、モスクワ行きの列車で行くけど、キミも一緒に来るかい? 7~8時間でモスクワに着くよ」ときた。ロシアなんぞで放っばり出されたら、それこそホントに強制連行されかねない。僕は、親切はありがたいけど、彼の怪しい誘いを断って、空港ロビーでアナウンスを待つことにした。寒いロビーで2時間ぐらい待たされたあげく、日本人4、5人を含む僕らの機の一行は、滑走路に通じる階段を下りてバスに乗せられた。バスは真夜中のヘルシンキ市内を走り、

民間のホテルへ直行した。

ホテルは大きくてきれいな、高そうなホテルだった。エンジ色の服を着た玄関のボーイさんが日本人だったのには驚いた。「冬の時期はよくあるんですよねえ」と、苦笑いしていた。黄色がかかったシャンデリアの光は、見た目にも暖かみがあって、これも寒さが厳しい国の生活の知恵なんだろうなあと思った。部屋は広くて清潔、ベットも上々で、僕は同じくスペインに一人で行くという同年代くらいの日本人と二人で、その部屋を使うこととなった。彼は、古物商に弟子入りしたばかりで、「本物の美術品を見てこい」と、2週間のヨーロッパ旅行に出されたと言っていた。いきなり予定変更になって、困り果てていた。自分の仕事として「古物商」というのが全く頭になかったので「こんな風にして古物商という人が誕生してくるのだなあ」と新鮮に感動してしまった。

とんだハプニングだけれど、費用はもちろん航空会社持ちなので、僕は不安ながらもなんだか得した気分になった。初めての海外一人旅で、初日からいろいろあって疲れているはずなのに、興奮してなかなか眠れなかった。窓から夜景を見たりして、明け方まで起きていた。

翌朝、バイキング形式の美味しい朝食を食べていると、モスクワ空港が使えるようになったので、モスクワへ移動するとの知らせがあり、僕らは急いで朝食を食べ、バスの中から少しだけヘルシンキ市内を眺め、昨日の飛行機でモスクワへ飛んだ。ヘルシンキの市内は池のような所がたくさんある、きれいな街だった。

飛行機はモスクワ空港の滑走路の端のほうに止まり、一行は、モスクワで降りる人と、さらに他の国へ行く人に分けられ、別々のバスに乗せられた。モスクワで降りる人の列の中に、あのロシア人がいる

のを見た瞬間、僕は昨日の彼の話が全部ウソだったんじゃないかと思った。

バスの窓から見たモスクワ空港の建物は、色もコンクリートの色のままで寒々しかった。外側の通路を、自動小銃を両手で持って歩いている軍人を見たときは、ちょっと恐ろしかった。バスはそのまま空港ゲートを出て、モスクワ空港の空港ホテル裏口に着いた。

パリへ向かう人はその日の午後、ロンドン行きの方は次の日、そしてマドリード行きはそのまた翌日に飛行機が出るとのことだった。入国手続きをしていないので、ホテルからは一步も出られない、後で気づいたのだが、僕らが入った側は、そのホテルの正面玄関側とは完全に隔離され、入りロドアは頑丈にカギが掛けられていた。そのホテルで、僕は当時のロシアの経済状況を目の当たりにすることとなった。

まず、ロビーも廊下もどんよりと暗い。やっと物が見えるくらいの明るさなのである。もちろん立派なシャンデリアや、廊下の天井には等間隔に電球が埋め込んでいる。だが、電気がついていないのはたった一つの電球だけなのである。停電中かと思ったが、僕らが入った間中ずっとそうだった。

部屋は一人部屋で、入りロドアのカギはかなり古く、真鍮の色をした、単純な形のカギを差し込んで、一回転半くらいまわすとようやくカギが掛かる仕掛けになっていた。部屋の中は小さ目のシングルベット二つと、なぜか大小4つの机があって、椅子は一つも無かった。机はどれも引出しが無くなっていたり、金具が外れてなくなっていたりした。壁の下の方にコンセントの差込と電話線の穴、テレビのケーブルの穴があったが、どれも使われていなかった。トイレ、浴室についても、驚くべき古さだった。トイレに便座がまだついているのを確認して、それだけは安心した。窓は木枠の二重窓が1つ。ためしに空けようとする、外側の窓がきしんでなかなか開かず、思いっきり押してやったら全開になり、凍りつくほど冷たい風が吹き込んできて、慌てて閉めた。

夕食：茹でた鶏肉（5×2×2cm、塩味）×1；

漬物（材料不明、赤い色、塩と酢）少々；パン（小さくて丸い、味が無い）×1、ゴハン（ベチャベチャで薬くさい）機内食と同じアルミパック、ハンバーグのような何か（7～8×2×1cm、塩こしょう味）×1、お茶（一人一杯まで、唯一暖かいものだった）、悲しくなった。今朝食べたヘルシンキでの朝食が急激に恋しくなった。

レストランの太ったおばちゃんが、ワゴンにワインやミネラルウォーターを入れて持ってきてくれたので、少し嬉しくなった。1本10US\$とのこと、さらに悲しくなった。それを聞いた旅行者から、その場に冷やかな笑いが起こり、おばちゃんは一瞬照れ笑いのような表情になって、またすぐに無表情にワゴンを押していった。この国は本当に物が無いのだと実感し、国を代表して笑われているようなそのおばちゃんが気の毒に思えた。

こんなわけで、僕の旅は最初からつまづくことになり、このホテルでの計8回の食事を何とかクリアして、日本を出て4日後にようやくスペインの地にたどり着く事ができた。奮発して予約したスペインでの初日のホテルは、もちろん幻となった。

スペインに入ってからいろいろな思い出があるけれど、この最初の4日間は、この旅を最も旅らしくした、決定的な得難い経験だった。モスクワでホテルに監禁されている間に、他の沢山の外国人と仲良くなれたのも、あのホテルがあれほどまでにオンボロだったからだと思う。僕らは互いに自分の部屋を見せ合い、いかに自分の部屋がヒドイものであるかを競い合った。そのうちに誰かがウイスキーを出してきて、1つの部屋に集まりだし、廊下を通る人をさらに引き込んで、旅のハプニングや、各国の習慣の違いなんかをワイワイ話した。

トラベルはトラブルである、と言った人がいた。だからハラハラドキドキ、面白いのだと思う。かれこれ9年も前のことなのだが、あの旅はどの場面も輝いている。

昨年、この旅で仲良くなったスペイン人が突然来日し、8年ぶりの再会を果たした。僕のスペイン語はすっかり駄目になってしまっているし、彼はスペイン語以外は話さない。電話で話していて、互いに

ちっとも話が通じず、あまりの通じなさに、話の途中で双方とも大爆笑となった。彼に再び会い、一緒に東京を遊び歩いた数日間は夢のような出来事だった。あのとき、「いつか日本に来ることがあったら必ず知らせてくれ」と言ってスペインを後にしたが、自分の中でどこかに「自分が行くことがあっても彼が日本に来ることはないだろうな」という予想が

あったからだった。

別れ際に彼が言った。「今度はおまえが来る番だからな、いつ来る？、正月か、来年か？」こちらの予想を覆され、軽々と来日されてしまったので、こちらも「ちょっとスペインまで」という気持ちで気軽に構えて、次なる再会を是非実現したいと考えている。